

「家庭科指導法研究」における被服製作実習についての一考察

中村真由美*

Consideration on Clothes-making Projects
in the course of the “Study of Teaching Method of Home Economics”
Mayumi Nakamura

要約

「家庭科指導法研究」の授業における被服製作実習の内容及び指導法を検討するために、アンケート調査とワッペン付きのティッシュケースを教材として被服製作実習を行った結果、以下のことが明らかになった。1.家庭科を教える際の学生の不安は、実習（特に被服製作実習）に関する技能に自信が持てないことに起因している。2.学生の被服製作実習に関する技能に自信が持てない原因は、小・中・高校での被服製作実習経験が少ないことにある。3.今回被服製作実習教材として扱ったワッペン付きのティッシュケースは、小学校家庭科で学習する色々な縫い方を習得でき、なおかつ短時間で製作できるため完成の達成感をも味わうことができる教材である。4.授業の終わり毎に作業状況を製作物の画像付きで学生に送ってもらったメールは、学生の製作進度を把握するのに有用であった。

キーワード：家庭科教育，被服製作実習，教材，小学校教員養成課程

Abstract

To investigate the suitable content and teaching method for the clothes-making project in the course of the “Study of Teaching Method of Home Economics” a survey and actual clothes-making project using a batched tissue case as teaching material was done. The following are what was revealed during the class. 1. The students feel their skills on home economics are lacking, and they are not confident in the practice. 2. The reason why the students are not feeling confident is due to the lack of experience of the similar training in elementary school, middle school and high school. 3. The batched tissue case that was used as a teaching material for this project was found to be very successful. This teaching material allows students to learn basic sewing skills in a short period of times. 4. A photo of the work sent by students at the end of every class was a good indicator of their progress.

Keywords: home economics education, clothes-making project, teaching material, elementary school teachers training course of university

*受理年月日 2017年7月27日

1. はじめに

現行学習指導要領において、小学校家庭科の目標は「衣食住などに関する実践的・体験的な活動を通して、日常生活に必要な基礎的・基本的な知識及び技能を身に付ける」[1]と示され、被服製作に関するものとしては「C 快適な衣服と住まい」において「ボタン付けや洗濯ができること」, 「生活に役立つものの製作」が記されており、家庭科を担当する教師が被服製作に関する知識と技能を身につけておくことは不可欠である。

本学における「家庭科」に関する授業は、現在、発達科学部子ども発達学科の学生を対象に、「子育て支援に関する専門科目」の「子どもの知性の発達を促す科目」として「家庭」、及び「教育実践に関する専門科目」の「教科指導に関する科目」として「家庭科指導法研究」が開講されている。

「家庭」は小学校教諭一種免許状取得のための選択科目の一つであり、180分間15回の授業時間のうち、実習に知識や技能がある程度定着するまで時間を割くことができる。しかし、選択科目であるため履修しない学生も多い。一方、90分間15回の授業を行う「家庭科指導法研究」は必須科目であるため小学校教諭一種免許状を取得し、小学校教諭を目指している学生は必ず履修する。しかし、「家庭科指導法研究」を受講する学生全員が「家庭」を履修済みとは限らない現状であるので、被服製作に関する知識や技能の習得のため「家庭科指導法研究」においても被服製作実習の時間を設けているが、「家庭科指導法研究」では指導法に関する他の内容を扱う必要があり、被服製作実習に費やすことのできる時間は限られている。長山が「教員養成大学において、家庭科教員を目指す学生への被服製作指導力を育成するためには、「縫い」の技法（手縫い、ミシン縫いなど）と短時間で製作可能な教材研究が重要になると思われる」[2]と述べているが、「家庭科指導法研究」の授業においても小学校の家庭科の被服製作における「縫い」の技法を網羅し、短時間で製作可能で、完成の達成感や製作の楽しさを味わうことができ、なおかつ材料の調達が簡単である被服製作実習教材が必要であると考ええる。

昨年度までの「家庭科指導法研究」の被服製作実習では、手縫いの基礎として晒し木綿で基礎縫いをしたのちに巾着袋やポケット付きのポケットティッシュケースを教材として扱っていた。

しかし、晒し木綿での基礎縫いは製作への意欲や完成時の達成感が得られにくいこと、また、巾着袋やポケットティッシュケースの製作は使用する布地や副資材等の調達に費用がかかる、予定時間内で完成しない者が多いなどという問題点があった。そこで今期は晒し木綿での基礎縫いはやめ、短時間で完成し、作品作りに直接結びつき意欲や達成感を得られるよう、フェルトでワッペンを作り、そのワッペンをつけたティッシュケースを被服製作実習教材として設定した。

また、被服製作に関するアンケートを実施し、学生の被服製作実習についての実態を把握することにより、「家庭科指導法研究」の授業における被服製作実習の指導内容を検討したい。

2. 方法及び内容

2017年度前期「家庭科指導法研究」を受講している学生に対して、初回の授業、被服製作実習前及び実習後に家庭科や被服製作実習に関するアンケートを行った。被服製作実習には90分間の授業の2.5回を充てた。実習教材としてはワッペン付きのティッシュケースを扱った。家庭科や被服製作実習に関するアンケート調査と被服製作実習の内容は以下の通りである。

2.1 対象

調査対象は2017年度前期「家庭科指導法研究」履修学生 男子11名、女子8名、計19名である。

2.2 アンケート調査の実施時期及び内容

2.2.1. 初回の授業でのアンケート

初回の授業でのアンケートでは、①教員志望の有無、②教員になり5・6年生の担任になった場合、家庭科の授業をしたいかどうか、③家庭科の授業をするにあたって不安に思うことは何か、④これまでの家庭科の授業での実習教材（調理実習及び被服製作実習）、⑤家庭科が好きかどうかなどを調査項目として設定した。

2.2.2. 被服製作実習前のアンケート

被服製作実習前のアンケートでは、①被服製作実習が好きかどうか、②被服製作の基礎技能についての学生の自己評価を調査項目として設定した。②の被服製作の基礎技能についての自己評価の調査項目は赤崎[3]のものを使用した。

2.2.3. 被服製作実習後のアンケート

被服製作実習後のアンケートでは、①ティッシュケースの製作実習についての問い及び②被服製作実習前のアンケートと同じ被服製作の基礎技能についての学生の自己評価を調査項目として設定した。

2.3. 被服製作実習の内容

2.3.1. ワッペン付きのティッシュケースについて

ワッペンはフェルトを用いて玉結び、玉どめの練習が数回できるものという条件のみ提示し、各自自由にデザインを考えて製作することとした。また、ティッシュケースの製作には小学校で学習するなみ縫い、半返し縫い、本返し縫い、かがり縫い、ボタン付け、ミシン縫いの全てが含まれるようにした。ティッシュケースの製作に必要な材料は、縦25cm横28cmの布地、ボタン1個及び紐またはリボン約10cmである。縦25cm横28cmの布地は、カットクロスとして販売されているものも利用できるため準備しやすいと考えた。ワッペンやティッシュケースの製作に必要な材料は全て学生が各自準備した。

学生がデザインし、製作したワッペンのうち玉結び、玉どめがよくわかる作品を資料1に示す。

また、ティッシュケースの作り方として学生に配布した資料を資料2に示す。

2.3.2. 製作進度の把握方法について

個々人の製作進度の把握のため、被服製作実習の終了時毎にその授業での製作内容と製作途中の作品の写真を撮ってメールに添付し筆者宛に送信することにした。スマートフォンなどの機器を持っていない学生に対しては筆者が写真を撮ることになっていたが、該当学生はいなかった。

学生からのメールを抜粋したものを資料3に示す。

3. 結果及び考察

3.1. アンケート調査の結果及び考察

3.1.1. 初回の授業でのアンケート

(1) 教員志望の有無について

19名の受講生のうち教員志望13名、志望していない3名、わからない2名であった。

(2) 教員になり5・6年生の担任になった場合、家庭科の授業をしたいかどうか、またそう考えた理由を尋ねたところ、表1に示す結果が得られた。家庭科の授業を「絶対指導したい」と思う学生は、家庭科が好き、楽しいという家庭科に対する好印象を持っていることが分かった。「専科の先生がいたらしたくない」という回答をした学生には知識や技能に自信が持てないという理由が多く見られた。これは赤崎の「専科の先生がいたらしない」と答えた学生の理由は、その専門性が自分の身につけていないからであろう」[3]という推測通りであった。

また、「できればしたくない」と答えた学生は3名で、「得意ではない」という理由であった。

表1 家庭科の指導意欲とその理由

回答	その理由
絶対指導したい 3名	学習支援ボランティアで5、6年の家庭に入る事が多く、家庭科の楽しさ面白さについて知ることができたから。家庭科は好きな方だから。 小学校の頃や中学校の頃家庭科が楽しかったから。 自分が小学校の時に家庭科がとても好きで、児童にも家庭科の面白さ、楽しさに触れてもらいたいから。
しても構わない 3名	専科の先生がいたらその先生と話し合っ決めてみたい。いないなら自分で教えたいと思う。 管理栄養士に興味を持っていた時もあり、栄養についてなどは好きだし裁縫なども好きだから。 自分が家庭科の授業をしている姿が想像できないから絶対したいとはならなかった。
専科の先生がいたらしない 10名	自分がするよりもっと専門の人がいるのならその方が子どもたちに家庭科の知識や技量が身につくと思うから。自分が小学校の時はそうだったから。 家でもたまたま料理したり「食」には興味があるので。 料理や被服製作をすることは好きなため、子ども達に教えてあげたいとは思いますが。しかし、自信を持って「これが正しい例です」とは言いにくいから。また、うまく説明ができるとは思えないから。 包丁持ち歩く先生とか児童の身が危ないと思います。もっと自信を持って料理できたらしてもいいかなという感じです。 専門の先生がいるのならば知識も違い家庭科の従業なことを教えられることができると思ったから。 家庭科は今まで授業を受けてきてあまり得意ではないのでできればしたくないです。期待より不安の方が大きいです。 自分が雑な性格で家庭科が苦手だから。子どもたちに教えるには責任持てる自信がないから。 専門の人が始動することが一番良いと思うから。 自分自身でも勉強しますが、専門としている方よりうまく教えられるとは思わないので専科の先生がいたらしません。 専科の先生の方が子ども達が必要としている知識や技術をより分かりやすく伝えられると思うから。補助として入れるのであれば入りたい。
できればしたくない 3名	得意じゃないからしてもあつたふたしている。 料理や縫い物が苦手子ども達のお手本にならないかもしれないので、逆に悪いお手本になってしまい、子ども達に悪影響を及ぼしてしまう可能性があるためあまりしたくない。 教員になることはないが、あまり家庭科が得意ではないから。

(3) 家庭科の授業をするにあたって不安に思うことについて、全員の回答を表2に示す。ほとんどの学生が実習についての技能面、準備、安全面、衛生面を不安に思っているようである。「裁縫」について不安に思っている学生が多くみられたことは着目すべきことであろう。前述(2)の結果と合わせて考えると、家庭科の指導において技能面、特に被服製作に関する技能に自信が持てないことが家庭科の授業を指導する上での不安となっていると考えられる。

表2 家庭科の授業をするにあたって不安に思うこと

子どもが怪我をした時の対応。説明が長くなってしまわないのか。注意しなければならないことを説明し忘れることはないか。
裁縫が全然できないこと
裁縫や調理実習などの活動や、その中で細かい技法などをきちんと子どもたちに身につけさせ、実践させてあげられるかどうか。
裁縫が本当に苦手なので、それをできるかどうか不安です。
裁縫が苦手です。なのでうまくできるかどうか不安です。
衛生面のこと。
1対2、30人なので危険点をしっかり言っても、怪我をするかもしれないから全体を見ることができないか不安です。うまく伝えることができるかどうか。
技術と安全面への自身への不安と実際の際の衛生面が気になります。
調理実習、ミシンなど子どもが怪我をしそうな授業は不安だと思う。
実技が中心なので、その技術を身につけられてなお教えることができるかどうかです。
実習時の安全への配慮。不器用なため細かい作業など手本ができない
準備物を備えることができるかどうか。
自分が模範となれるのかということ
ガスコンロの使い方がいまいちわからない。
包丁や針を使うとき、注意しても言うことを聞かない子がいないか不安
準備が大変なところ。ミシンなどの使い方などわからない子が多いと思うけど担任一人で一人ずつ教えるのは難しそうだし大変そう。
児童が見えないところで怪我をしてしまうこと
被服製作が苦手
料理の知識もなく縫い物も手先が不器用なのでお手本になるかわからず不安です。

(4) これまで経験した家庭科での実習教材について、今回は被服製作実習教材についてのみ表3に示す。覚えている学生の回答のみであるため全員の回答ではない。

表3 小・中・高校における被服製作実習教材 (人数)

	手縫い	ミシン縫い
小学校	雑巾(1) 布巾(1) エコバッグ(1) ポケットティッシュケース(1) ボタンつけ(2) ティッシュケース(4)	エプロン(9) ナップサック(9) 雑巾(2) ランチョンマット(1) 巾着袋(1) カバン(1) していない(1)
中学校	雑巾(2) ティッシュケース(3) よさこいで着る服(1) ポケットティッシュケース(1) ブックカバー(1) ランチョンマット(1) お箸入れ(1) ブックカバー(1) 絵本(フェルト)(1) していない(4)	ナップサック(4) していない(3)
高等学校	ティッシュケース(1) おもちゃ作り(1) ボタンつけ(1) エプロンの刺繍(1) していない(6)	雑巾(2) エプロン(2) お箸入れ(1) ペットボトルホルダー(1) していない(7)

のみ表3に示す。覚えている学生の回答のみであるため全員の回答ではない。

ミシン縫いを、小学校では1名が「していない」と答えていたが、中学校及び高等学校段階ではさらに多く見られ、特に高等学校では全体の約3分の1の学生が「していない」と答えていた。

中学校の技術・家庭科では、1989年の学習指導要領の改訂で、男女共修の実施により、女子にとってはいわゆる家庭分野の授業時間が半減し、被服領域が必修から選択になり、教材の例示がなくなった。さらに1998年の改訂では被服領域のうち、「衣服の選択と手入れ」は必修、「衣服の製作」は選択とされた。2008年の改訂では、製作教材は人体を覆うものに限定しなくなり、被服製作は必修に戻ったが、家庭科の時間数が減少（1969年改訂と

比較すると、2008年改訂では3割以下に減少)したため被服製作実習の時間が確保しにくくなったことが考えられる。

また、高等学校も同様に1989年の家庭科男女共修により「家庭一般」「生活技術」「生活一般」の中から1科目を選択し、4単位必修であったが、1999年の告示により2単位科目としての「家庭基礎」が新設され、4単位必修の「家庭総合」、「生活技術（現行では「生活デザイン）」との3科目のうち1科目を選択的に履修することとなった。学生が高等学校で4単位科目と2単位科目のどちらを履修したのかは今回調査していないが、被服製作実習の教材や、被服製作実習をしていないという結果から2単位科目であったことが推察される。

特にミシン縫いについては、板倉が「教師が授業の前後に準備・点検作業をする必要があるが、多忙なためにミシンの使用回数を極力減らした題材を選んだり」[4]するため「小学校から高校までの「家庭科」の学習でミシンを使う機会が減少している傾向が強い」[4]と述べているように指導者側の問題と、ミシンを使った場合も、ミシンの台数が十分ではなく、子どもが使いたい時に使えないという設備の問題、使い慣れていない場合に準備や糸調子を整えることに時間が取られるという子ども側の問題などが考えられ、中学・高等学校の限られた授業時間の中でミシンを使用することが避けられ、学習する機会が減っているであろう。その結果、ミシンを使用しての被服製作実習は小学校での学習経験のみの学生が多くなっていると考えられる。

(5) 家庭科を好きかどうか、またその理由について尋ねたところ、表4に示す回答が得られた。7割近くの学生が「好き」「どちらかというところ好き」と答え、その理由は実習（特に調理実習）が楽しいからと答えているものが多い。「嫌い」という回答はなかった。

表4 小・中・高校の家庭科は好きだったか

回答	理由
好き 7名	料理をすることが好きなので、調理実習が大好きで、そのおかげで家庭科が好きになった。何かを作り上げることが楽しいから。 他の授業をするよりは・・・という感じで好きでした。 自分の知らなかったことを知ることができ、家ですることができるから。料理をすることがもともと好きだからです。 楽しいから。 手芸系が好きだし、料理作るのも苦でないから。 楽しかった思い出が多いから。 料理をすることが好きで、裁縫も得意だったから。
どちらかというところ好き 6名	家庭科は苦手だったけど、グループで仲良く活動でき、楽しかったから。 裁縫は嫌いだったけど、調理実習があり、みんなと協力して作るの楽しいし、美味しかったから。 勉強しなくてよかったから。 ずっと座って勉強ではなく、友達と楽しく活動できたから。 実習をすることが多かったので楽しかったから。 調理実習が楽しいから。
どちらでもない 5名	調理実習は楽しかったです。 先生にもよる場合が多かった。授業面では実習は好きですが、筆記はあまり好きではなかった。 あまり料理や縫い物が得意ではなく、楽しいとは思わなかった。しかし、調理実習で作った料理をグループのメンバーで食べるのは楽しかったから。 調理実習は食べるのが好きですし、みんなで楽しく調理するので楽しかったです。被服は不器用でうまくできず、あまりいい印象はないです。 好きでも嫌いでもなかった。
どちらかというところ嫌い 1名	実習等机上だけで終わらない授業が苦手。不器用なのが目立つ。成績が良くない。

3.1.2. 被服製作実習前及び実習後のアンケート

被服製作実習前のアンケート結果及び実習後のアンケートのうち被服製作の基礎技能についての自己評価の結果について述べる。

(1) 被服製作実習前に被服製作実習が好きかどうか、またその理由を尋ねた結果を表5に示す。

表5 被服製作実習の好き嫌いとその理由

回答	理由
好き 6名	自分のオリジナルのものができるといことがとても嬉しいから。ミシンが楽しいから。 色々学べるから。どんどんできることが増えたり、知ることができるから。 製作楽しい。大好き。 楽しい。 ミシンを使うのも楽しいし、物作りをするのが好きだから。自分の作りたいように作ることができるから。 ミシンや裁縫が好きで、小中学校の時によく親と作っていたから。
どちらかという好き 5名	やっていて楽しいから。生活に即活用できることを授業内で学習できるのは嬉しいと思う。 物作りが好きだから 座学でじっとしているよりも楽しいし、作ったものが残るのは嬉しい。 手先を使う作業が好きだから。 楽しいから。普段からしているわけではないので「好き」とは言い切れない。
どちらでもない 2名	裁縫はあまり好きじゃない。 細かい作業が好きではないから
どちらかという嫌い 4名	全くできないから。けれど皆と一緒に話をしながら作ることは好き。 手先が不器用で苦手だからどちらかといえば嫌いです。でも、頑張ります。 手先が不器用。作品がまともに完成したことがない。 布の長さを測った切ったり、印をつけるのが面倒くさいから。
嫌い 2名	めんどくさくて不器用だから。 手先が不器用で何かを作るのが苦手だからです。針に糸を通すのも人より時間がかかり嫌になってしまうから。

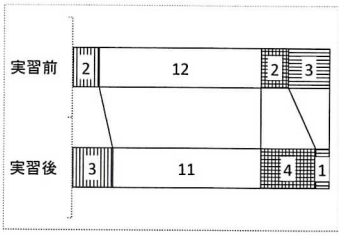
前述(5)の家庭科が好きかどうかよりは「好き」「どちらかという好き」と答えた学生は減っているが、約6割の学生が「好き」「どちらかという好き」と答えており、その理由には作ることの楽しさをあげているものが多かった。また反対に「どちらかという嫌い」「嫌い」と答えている理由は「不器用だから」が多かった。

(2) 被服製作の基礎技能についての学生の自己評価

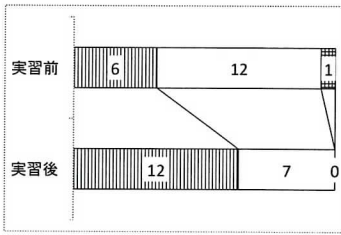
被服製作の基礎技能についての自己評価の結果を、被服製作実習の前後で比較したものを図1に示す。全ての項目において実習後に「よくできる」「できる」としたものが増え、「できない」「仕方がわからない」が減っている。このことより、今回教材として扱ったワッペン付きのティッシュケースの製作は、基礎技能の習得に効果があると言えよう。

実習後の回答で「できない」が多く見られたのは「Q1 体や物の寸法を測ることができますか?」、「Q9 指ぬきを使ってなみぬいができますか?」、「Q14 ミシンを使うときに、上糸、下糸の準備ができますか?」、「Q15 ミシンを操作して、糸の調子やはり目の大きさを調整することができますか?」の4項目であった。「Q1」については今回の実習では取り扱いをしていないことであるので実習前と実習後の差がほとんどないのは当然であると考えられる。「Q9」に関しては、実習中机間巡視で確認したところ、全ての学生がなみ縫いはできていた。指ぬきを使ってのなみ縫いの方法は示範したが、指ぬきの使用は学習指導要領でも指定されていないこともあり、「指ぬきを必ず使ってなみ縫いするように」とは周知していなかったためと思われる。「Q14」「Q15」のミシン縫いに関しては先のアンケートの結果からも、これまでの経験も少ないため、ここで知識や技能を習得して自信をつけておく必要があると考えられ、指導法の改善が必要である。

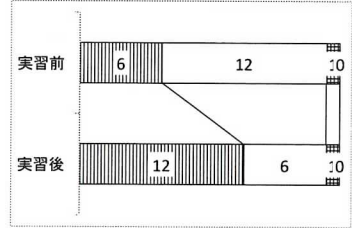
Q1体や物の寸法を測ることができますか？



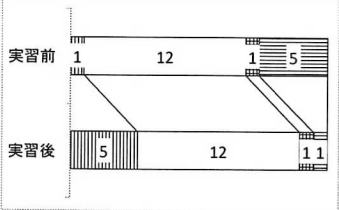
Q7針に糸を通すことができますか？



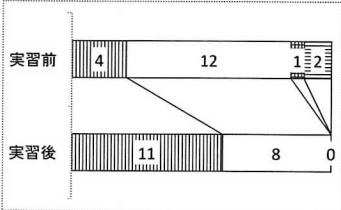
Q13糸切りばさみを使って糸を切ることができますか？



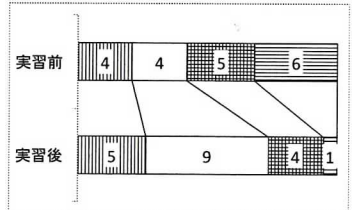
Q2大きさに合わせて、型紙(出来上がりの形と大きさを紙で作ったもの)を作ることができますか？



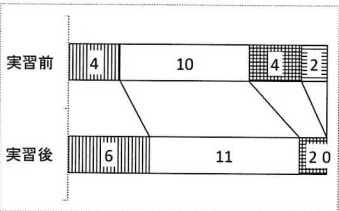
Q8玉結び(縫い始めに糸の端を結ぶ)ができますか？



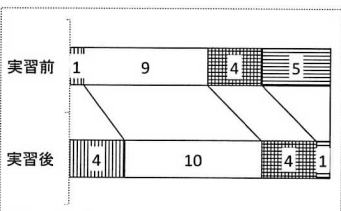
Q14ミシンを使うときに、上糸、下糸の準備ができますか？



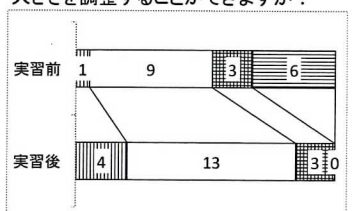
Q3型紙通りにしるしをつけることができますか？



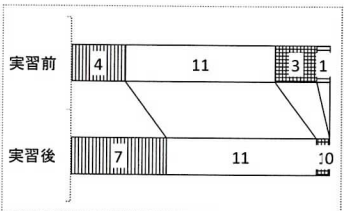
Q9指ぬきを使ってなみぬいができますか？



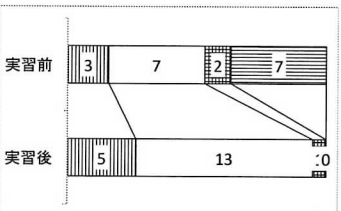
Q15ミシンを操作して、糸の調子や針目の大きさを調整することができますか？



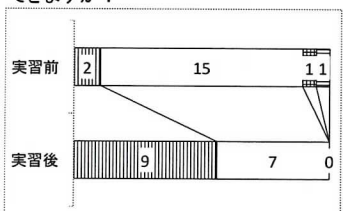
Q4しるしどおりに布を裁ちばさみで裁つことができますか？



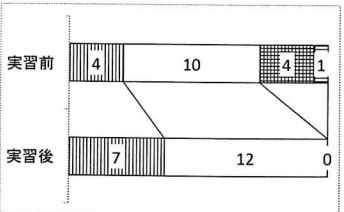
Q10本返し縫いができますか？



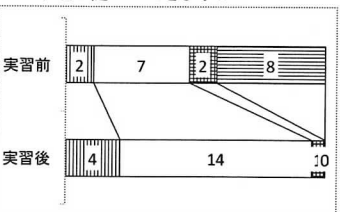
Q16ミシンで直線縫いをすることができますか？



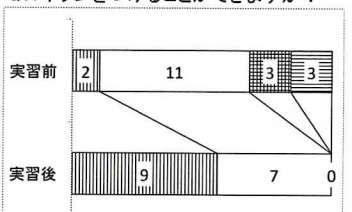
Q5布を三つ折りにすることができますか？



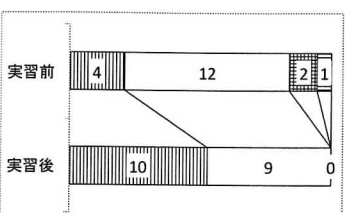
Q11半返し縫いができますか？



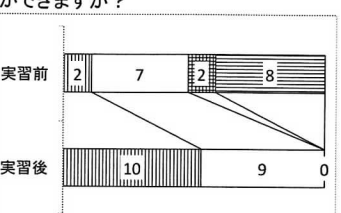
Q17ボタンをつけることができますか？



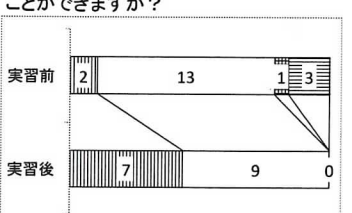
Q6布をまち針でとめることができますか？



Q12玉どめ(縫い終わりに糸の端をとめる)ができますか？



Q18布にあった温度でアイロンをかけることができますか？



☑ よくできる □ できる ☒ できない ☒ 仕方がわからない

8
図1 被服製作技能に関する質問 実習前, 実習後の比較(人数)

3.2 被服製作実習について

3.2.1 製作進度について

学生の報告を元に作成した製作進度を図2に示す。また、学生からのメールを元に作成した個人の進度表の例として2名分を資料4に示す。製作物の写真付きメールでの学生からの報告は、学生の進度や製作物の状態がよく把握でき、大変有用であった。

今回被服製作実習に1回90分の授業の2.5回を充てた。2.5回のうち最初の0.5回をワッペンの製作に、残りの2回をボタンつけの練習とティッシュケースの製作に充てた。ティッシュケースの製作の第1回目の授業までに自宅で布を裁断し、アイロンで三つ折りしてくることを課題にしていたが、していない学生が多かった。そのため、1回目の授業では半返し縫い完了までを予定していたが、到達できたのは3分の1の学生であった。また、2回目の授業で完成した学生はいなかった。しかし、教育実習期間中に教育実習に参加しない学生6名に90分1回の補講を行ったところ、その1回で完成もしくはほぼ完成した学生が2名おり、その2名になぜそのように早く作業が進んだのかと質問したところ、「先生が次の作業をすぐに知らせてくれたので次々とするのが分かり、アイロンやミシンなど待たずにすぐに作業ができたから」と答えた。このことはすなわち、作業手順や手法を十分理解でき、アイロンやミシンを使いたい時にすぐに使うことができれば、予定していた2回の時間内に完成することができたかもしれないということである。アイロンやミシンの台数には制限があるが、作業手順や手法の周知方法には改善の余地がある。

授業時間内に完成しなかった学生については、もうすでに授業時間内に練習済みのボタン付けと仕上げは自宅での課題にし、その他の作業は授業時間後に残って完成させた。

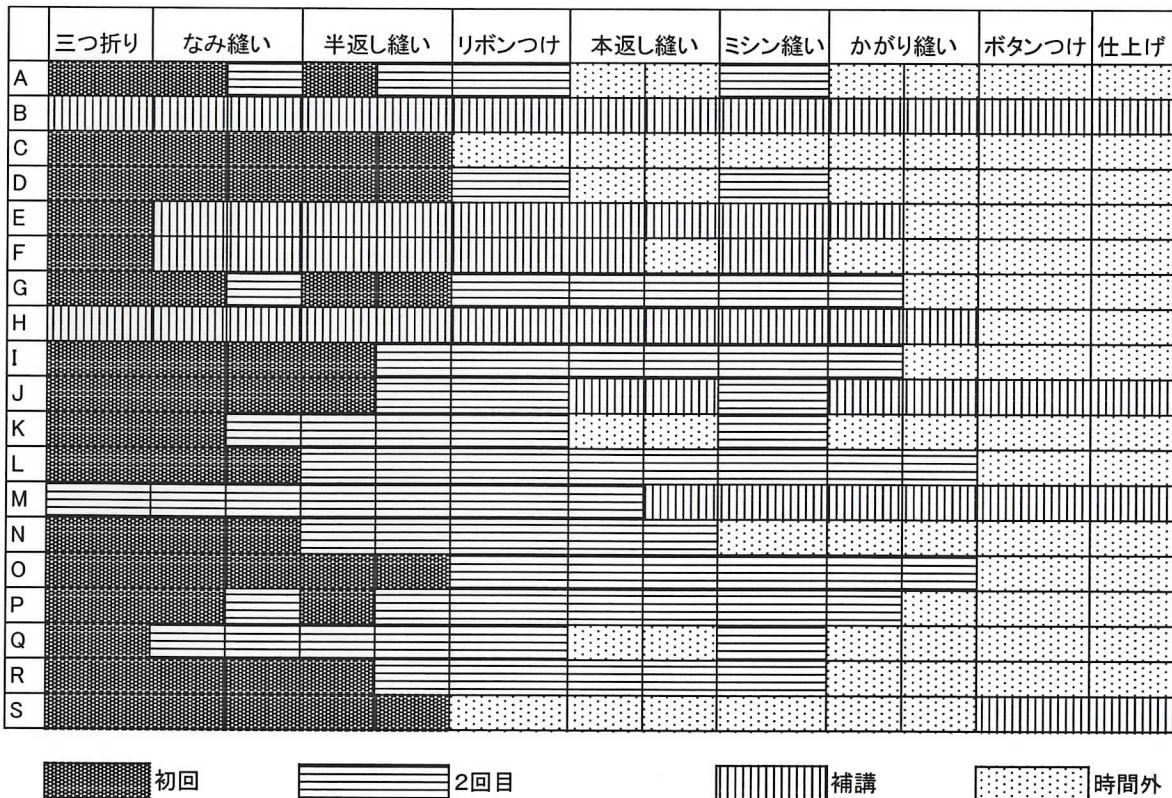
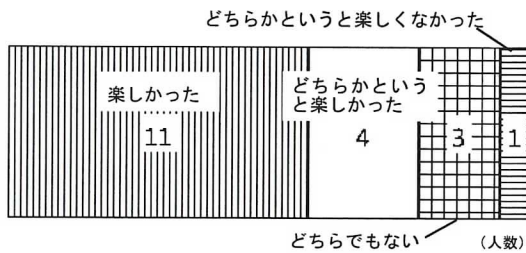


図2 ティッシュケースの製作進度

3.2.2. 被服製作実習後のアンケートのうちポケットティッシュケースの製作について尋ねた結果について

(1) ティッシュケースの製作実習が楽しかったかどうかを尋ねた結果を図3に示す。



約4分の3の学生が「楽しかった」または「どちらかといえば楽しかった」と答えていた。

ここで、先の被服製作実習前のアンケートで被服製作実習が「嫌い」または「どちらかといえば嫌い」と答えた学生が、実習後のアンケートにどう答えたか、またその理由を図4に示す。

実習前のアンケートで被服製作実習が「嫌い」と答えた学生は2名であった。

いずれもティッシュケースの製作実習の

図3 ティッシュケースの製作は楽しかったかどうか

授業を欠席したため、補講を受講して作業を進めた。実習後のアンケートで1名は「縫うのが苦手で遅れたから」「楽しくなかった」と答えているが、もう1名は「どちらかといえば楽しかった」と答え、その理由は「色々な縫い方があり（中略）経験できて嬉しかった」と答えていた。後者は先のアンケートで被服製作実習での製作経験は、小学校で手縫いのエコバッグのみでミシン縫いをするのは今回が初めてであったため、被服製作実習を経験できた喜びが楽しさに繋がったと考えられる。

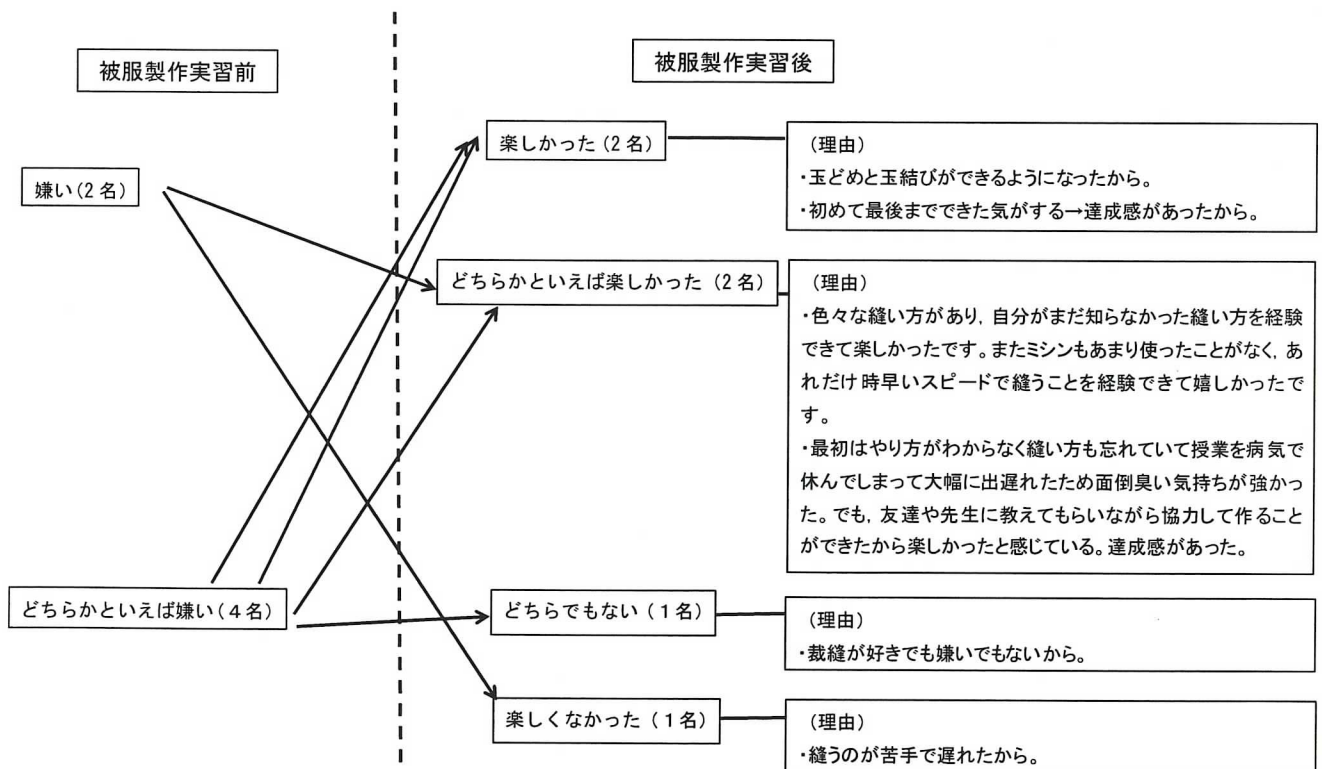


図4 実習前に被服製作が「嫌い」「どちらかといえば嫌い」と答えた学生の実習後の回答

また、実習前のアンケートで被服製作実習が「どちらかといえば嫌い」と答えた学生は4名であった。実習後のアンケートで、そのうち2名は「楽しかった」、1名は「どちらかといえば楽しかった」、1名は「どちらでもない」と答えていた。「楽しかった」「どちらかといえば楽しかった」と答えた理由は「玉どめと玉結びができるようになったから」「初めて最後までできた気がする」「達成感があった」と技能ができるようになった喜びや、作品を完成することができたという達成感が楽しさに繋がったようである。

先の6名以外の学生が「楽しかった」「どちらかといえば楽しかった」と答えた理由に「様々な縫い方が経験できた（3名）」や「ものを作る喜び（6名）」もみられた。

(2) ティッシュケースの製作の難易度を尋ねた結果を図5に示す。

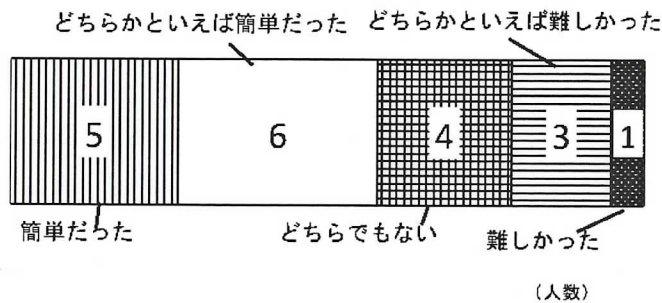


図5 ティッシュケースの製作は難しかったか

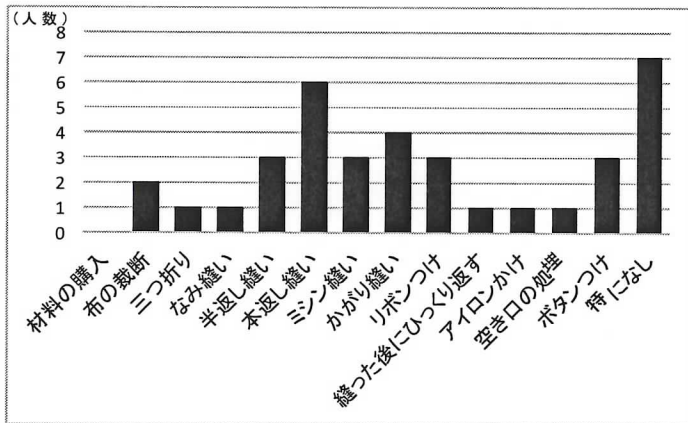


図6 ティッシュケースの製作で難しかったところ

「簡単だった」「どちらかといえば簡単だった」が19名中11名、「難しかった」「どちらかといえば難しかった」が4名であった。

(3) ティッシュケースの製作で難しかった作業を尋ねた結果（複数回答）を図6に示す。

作業手順のうち難しいという回答が多かったのは「本返し縫い（6名）」「かがり縫い（4名）」「半返し縫い（3名）」「ミシン縫い（3名）」「リボンつけ（3名）」「ボタンつけ（3名）」と手縫いまたはミシン縫いの部分であった。しかし「特になし」も7名あった。

以上の結果より、今回被服製作実習教材として扱ったティッシュケースは難易度が低く、様々な縫い方を網羅し、なおかつ短時間で完成することができ、達成感を味わうことができる教材であると言えよう。

4. おわりに

家庭科は「調理や裁縫を教える」ことが目的の教科ではない。また、社会の変化により日常生活における被服製作はかつてのように必要不可欠なものではなくなっており、家庭科において被服製作実習の意義を疑問視する声は全くないとは言えない。しかし、前述のように現行の学習指導要領において「C 快適な衣服と住まい」に「ボタン付けや洗濯ができること」、「生活に役立つものの製作」が、また、平成32年4月より実施の新学習指導要領[5]にも「B 衣食住の生活」に「ボタンの付け方及び洗濯の仕方を理解し、適切にでき

ること」，「生活を豊かにするために布を用いたものの製作」が記されており，小学校の教師になり家庭科の授業を実施するには被服製作に関する知識や技能を身につけておくことが必要である。学生が経験不足により被服製作実習に関する知識や技能に対する不安を持っているのであれば，自信を持って家庭科の授業を円滑に実施できるようになるために，知識や技能を習得する機会を設け，その不安を取り除いておく必要がある。「家庭科指導法研究」の限られた時間の中で小学校での家庭科の指導に必要な知識や技能をいかに習得させるか，学生の状況を把握しながら今後も実習教材や指導方法について検討を重ね，授業改善に努めたい。

引用文献

- [1]小学校学習指導要領解説家庭編，p. 8，文部科学省，2008，東洋館出版社
- [2]長山芳子，「大学生の小・中・高校時における被服製作経験とミシン実習後の変容-初等教員養成のためのハンカチ袋作り授業効果-」，福岡大学紀要60，第5分冊，p. 215-221，2011
- [3]赤崎真弓，被服製作基礎技能に対する学生の自己評価と被服実習授業の検討，長崎大学教育学部教科教育学研究報告，26，p. 111-122，1996
- [4]板倉明子，「家庭科教育」に関する授業方法の一考察 -小学校・中学校・高校における「家庭科」の授業実践を基にして-」，プール学院大学研究紀要第53号，p. 217-237，2012
- [5]小学校学習指導要領解説家庭編，p. 10，文部科学省 HP より，2017，
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2017/07/25/1387017_9_1_1.pdf

参考文献

- 猿田佳那子，「衣生活領域における実験・実習教材の変遷と現状-学習指導要領と家庭科教科書を参考として-」，同志社女子大学生生活科学第47巻，p. 46-51，2013

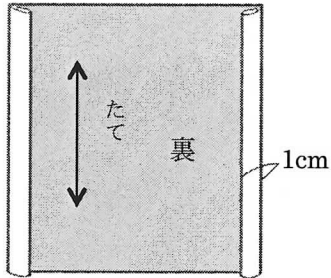
資料 1



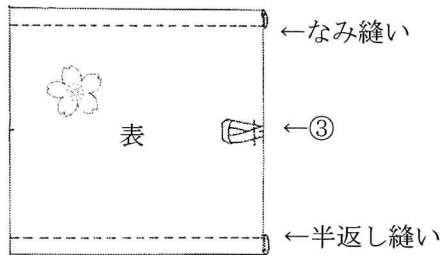
資料 2

作り方

- ① 布の両はしを三つ折りにする。

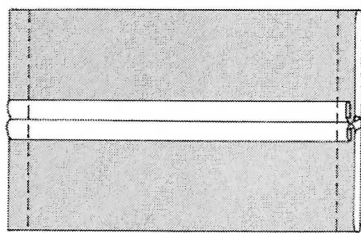


- ② 三つ折りしたところの端をそれぞれなみ縫い、半返し縫いする。



- ③ 真ん中の印のところにリボン(など)をしつけ糸でとめつける。

- ④ 三つ折り部分を真ん中で中表にして突き合わせる。



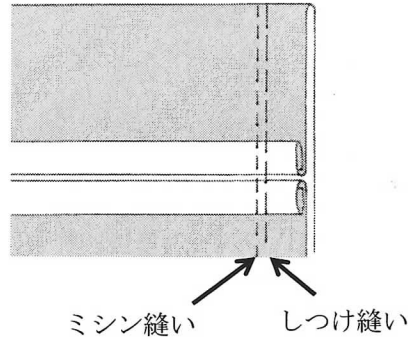
↑
⑤
ミシン縫い

隙間が開かないように。

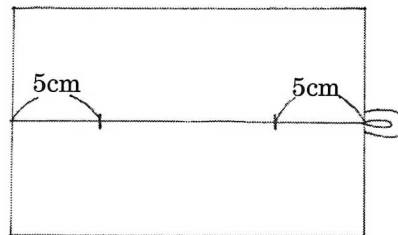
↑
⑤
本返し縫い

- ⑤ 端から 1cm のところをそれぞれ本返し縫い、ミシン縫いする。

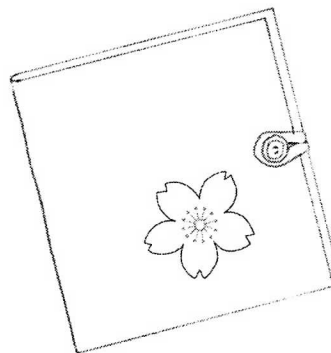
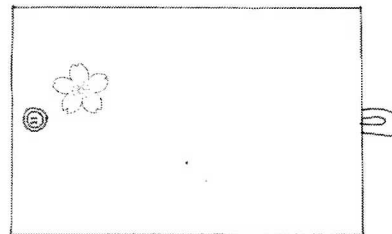
- ⑥ ミシン縫いするときには、縫うところの少し外をしつけ糸で縫っておく。



- ⑦ 角をきちんと出してひっくり返し、あき口の端から 5cm のところを手縫いでとめる。



- ⑧ ボタンをつけて出来上がり。



資料 3



今から並縫いです。



ワッペンつけかけと、なみ縫い・半返し縫い途中です！

今日はボタンつけ練習、
並縫い、半返し縫いをしました。
半返し縫いは指の置いているところまで塗っていて、まだ少し残ってます。
半返し縫いが間違っって最初本返し縫いになってたので気をつけたいです！



今日は返し縫いとなみ縫いをしました。
表の縫い方がグラグラになってしまって、残念でした。
楽しかったけど、針が刺さって痛かったなあ。



今日は布を切って三つ折りしてなみ縫いの途中です。
前回 病気で休んでしまって出遅れているので
追いつけるように頑張ります。

資料4

なまえ

ティッシュケースの製作



日付	三つ折り	なみ縫い	半返し縫い	リボン	本返し縫い	ミシン縫い	かがり縫い	ボタンつけ・仕上げ	作業内容	
20170427									針を使わずにする玉結びができないので、できるようにしなきゃなと思った。	ワッペン作り
20170511										ボタン付けとティッシュケースの製作
20170518										ティッシュケースの製作
20170525										時間外



5月25日提出

なまえ

ティッシュケースの製作



日付	三つ折り	なみ縫い	半返し縫い	リボン	本返し縫い	ミシン縫い	かがり縫い	ボタンつけ・仕上げ	作業内容	
20170427									玉結び、玉止めでの表現はなかなか難しかった。次で綺麗に仕上げたい。	ワッペン作り
20170511										ボタン付けとティッシュケースの製作
20170518										ティッシュケースの製作
20170601										時間外



6月1日提出